

令和6年度病害虫発生予察情報 発生予報第7号(8月)

令和6年8月28日
発表：福島県病害虫防除所

1 普通作物

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
大豆	紫斑病	全域	—	平年並	天候予報（仙台管区气象台8月22日発表）によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は多いと予想されている（±）。	開花後20～40日頃に薬剤を1～2回散布する。その際、薬剤が莢に十分付着するようにする。 適期収穫及び速やかな乾燥調製を心がける。
	べと病	全域	—	平年並	8月の巡回調査での発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	「里のほほえみ」などのべと病にかかりやすい品種では、過繁茂で通気性が悪くならないように注意する。 発生が多く見られるほ場では、薬剤散布を行う。
	吸実性カメムシ類	全域	—	やや多い	8月の払落し成虫数は、例年よりやや多かった（+）。	発生がみられる場合は、着莢期（8月中下旬）～子実肥大期（9月上～下旬）に薬剤散布を実施する。
	フタスジヒメハムシ	全域	—	平年並	8月の払落し成虫数は、例年並であった（±）。	発生がみられる場合は、子実肥大期に薬剤散布を実施する。
	チョウ目幼虫	中通り 会津 浜通り	—	平年並 多い	8月の払落し成虫数は、中通り、会津で例年並（±）、 浜通りで例年より多かった（+）。	<u>幼虫の虫齢が進むと加害量が急激に増加するため、食害が見られたら速やかに薬剤散布を実施する。</u>

注) 予報の根拠の中で（+）は多発要因、（-）は少発要因、（±）は平年並要因であることを示す。

2 果樹

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
リンゴ	斑点落葉病	全域	—	平年並	新梢葉での発生ほ場割合は平年並であった(±)。	天候に注意しながら、散布間隔があきすぎないように薬剤散布を実施する。
	褐斑病	全域	—	平年並	新梢葉での発生ほ場割合は平年並であった(±)。	現在、本病の二次感染期であるので、感染拡大を抑制するため天候に注意しながら、散布間隔があきすぎないように薬剤散布を実施する(令和6年6月26日付け令和6年度病害虫防除情報(リンゴ褐斑病)参照)。
	炭疽病	全域	—	平年並	果実での発生ほ場割合は平年並であった(±)。	降雨が多い場合は9月上旬以降も防除を行う。
	キンモンホソガ	中通り 会津	— —	やや多い 平年並	新梢葉での発生ほ場割合は、中通りでは平年よりやや高く(+)、会津では平年並(±)であった。	本種の発生が多い場合は、防除を行う。
	シンクイムシ類	全域	—	平年並	果実被害の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	シンクイムシ類の発生が多い場合は、防除を行う。被害果は園内に放置せず適切に処分する。
	ハマキムシ類	全域	—	平年並	果実被害の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	
	ハダニ類	全域	—	平年並	新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	園内の発生状況を確認し、要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、薬剤散布を実施する。
モモ	せん孔細菌病	中通り	—	やや少ない	新梢葉、果実での発生ほ場割合は平年よりやや低かった(-)。	秋雨や台風の襲来が予想される時期なので、天候に注意しながら秋期防除を必ず実施する。
	モモハモグリガ	中通り	—	平年並	新梢葉被害の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	
	ハダニ類	中通り	—	やや多い	新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年よりやや高かった(+) 。	園内の発生状況を確認し、要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、薬剤散布を実施する。
ナシ	黒星病	全域	—	平年並	新梢葉、果実での発生ほ場割合は平年並であった(±)。	本病の発生が多い場合は、「幸水」収穫後に秋期防除を行う。
	シンクイムシ類	全域	—	やや多い	ナシヒメシンクイによる果実被害の発生ほ場割合は、平年並よりやや高かった(+) 。	モモやナシの果実被害や近隣のモモやウメ等の核果類の芯折れの発生状況に注意し、防除を徹底する。

ナシ	ハマキムシ類	全域	—	平年並	果実被害の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	
	ハダニ類	全域	—	やや多い	新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年よりやや高かった(+)	園内の発生状況を確認し、要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、薬剤散布を実施する。
果樹共通	カメムシ類	全域	—	多い	フェロモントラップにおける越冬世代および第1世代成虫の誘殺は平年より多かった(+) リンゴ、ナシでの果実被害の発生ほ場割合は平年よりやや高かった(+)	カメムシ類の園地への飛来状況をよく確認し、多数の飛来が確認された場合薬剤散布を実施する(令和6年7月30日付け令和6年度病害虫発生予察情報注意報第3号参照)。

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(-)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

モモ ナシ	<p>■ナシヒメシンクイ</p> <p>病害虫防除所の8月上旬の巡回調査では、本種によるモモ新梢の芯折れ被害発生ほ場割合が6割程度と平年より高い状況です。また、「中」発生ほ場が多数見つかっています。</p> <p>ナシヒメシンクイ第4世代成虫の誘殺盛期は、気温が2℃高く推移した場合、8月6半旬頃と予測され、第5世代幼虫の防除適期は9月1半旬頃と推定されています(農業総合センター果樹研究所、8月26日現在)。</p> <p>モモやナシの果実被害や近隣のモモやウメ等の核果類の芯折れの発生状況に注意し、県農作物病害虫防除指針や地域の防除暦を参考に、農薬使用基準を遵守し、防除を徹底しましょう。</p>
モモ	<p>■モモせん孔細菌病</p> <p>8月中旬の新梢葉での発生ほ場割合は平年よりやや少ない状況ですが、9月は台風が発生が多い時期にあり、今後の天候しだいでは、新梢葉での発生が増加するおそれがあります。本病は秋期に降水量が多いと翌春に春型枝病斑の発生が多くなる傾向にあるため、収穫が終了した園では降雨前の秋期防除を徹底し、越冬病原菌密度の低下を図りましょう。</p>
果樹共通	<p>■果実吸蛾類</p> <p>果実が成熟し始めると、果実吸蛾類の成虫が夜間に果樹園に飛来し、果実を吸汁加害することがあります。果実吸蛾類は山林原野に生息しているため、そういった場所に近い園地では注意が必要です。対策として、多目的防災網等の物理的防除、糖蜜(砂糖200g、酒200cc、酢200cc、水1400ccを混ぜ合わせたもの)を誘引源とした食餌トラップが有効です。</p>

3 野菜・花き

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
夏秋トマト（被覆栽培）	灰色かび病	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は平年よりやや低かった（－）が、発病度の高いほ場が確認されているため注意が必要である。	多湿条件で発生が多くなるので、換気を十分に行う。
	葉かび病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	多湿条件で発生が多くなるので、換気を十分に行う。
	すすかび病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	多湿条件で発生が多くなるので、換気を十分に行う。
	アブラムシ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。 ほ場の開口部をネット被覆するように努める。
	コナジラミ類	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は平年よりやや高かった（＋）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。 寄生種がタバココナジラミの場合は、トマト黄化葉巻病を媒介することがあるため注意する。
夏秋キュウリ（露地栽培）	べと病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	多湿条件が続くと発病しやすくなるので、発生初期から防除を実施する。
	うどんこ病	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は平年よりやや低かった（－）。	まん延すると防除が困難となるので、発生初期から防除を実施する。
	炭疽病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	発病葉は摘除し、発生初期から防除を実施する。 排水対策の徹底、降雨による土のはね上がり防止に努める。
	褐斑病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年より低かった（－）が、天候予報（仙台管区気象台8月22日発表）によると、向こう1か月の期間の前半は気温がかなり高くなると予想されている（＋）。	発病葉は摘除し、発生初期から防除を実施する。 被害茎葉残さは必ずほ場外に持ち出して処分する。 また、資材の消毒に努める。
	つる枯病	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は平年より高かった（＋）。	発病葉や発病枝は摘除し、発生初期から防除を実施する。
	アブラムシ類	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は平年よりやや高かった（＋）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハダニ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	低密度時から防除を徹底する。 薬剤抵抗性の発達が懸念されるため、薬剤の選択に注意する。

キク（露地栽培）	白さび病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）が、病斑が上位葉に発生しているほ場があるため注意が必要である。	多湿条件が続くと発病しやすくなるので、予防散布に努める。 品種により発病に差があるので、発病しやすい品種では防除を徹底する。
	アブラムシ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハダニ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	低密度時から防除を実施する。 薬剤抵抗性の発達が懸念されるため、薬剤の選択に注意する。
	アザミウマ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、低密度時から防除を徹底する。
リンドウ ※過去9年間の平均値と比較	葉枯病	全 域	—	例年並	発生ほ場割合は例年並であった（±）。	多湿条件で発生が多くなるので、予防散布に努める。
	褐斑病	全 域		多い	発生ほ場割合は例年より高かった（+）。	収穫後、発病葉をほ場内に残しておく、次年度の発生源になるため、早めにほ場外へ持ち出し、地中に埋めるか焼却処分する。
	黒斑病	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は例年よりやや低かった（-）。	降雨が続くと発病しやすくなるため、予防散布に努める。
	ハダニ類	全 域	—	例年並	発生ほ場割合は例年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。
野菜・花き共通	リンドウホソハマキ	全 域	—	例年並	発生ほ場割合は例年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、防除を徹底する。
	タバコガ類	全 域	—	多い	発生ほ場割合は平年並であった（±）が、フェロモントラップデータによると、8月下旬の誘殺数が増加している（+）。	生長点付近をよく観察し、寄生や被害が見られた場合は、速やかに防除を行う。

注）予報の根拠の中で（+）は多発要因、（-）は少発要因、（±）は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病虫害

夏秋トマト（被覆栽培）	<p>■トマトかいよう病</p> <p>本病は種子や土壌中の残渣に生存している病原細菌が第一次伝染源となり、その後、芽かきや収穫、誘引などの管理作業による二次伝染により被害拡大します。発病が疑われる株は管理作業を後回しにし、作業手袋やハサミ等をこまめに消毒し、被害拡大を防ぐようにしてください。万が一、ほ場で発生した場合は、発病株を速やかに抜き取り、ほ場外に持ち出し適切に処分してください。昨年発生しているほ場では注意してください。</p>
-------------	---

より詳しい発生状況や防除対策は、

福島県病虫害防除所ホームページ<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>をご覧ください。

お問い合わせはTEL:024-958-1709、FAX:024-958-1727またはe-mail:yosatsu@pref.fukushima.lg.jpへお願いします。

- ◆福島県では6月10日から9月10日まで令和6年度農薬危害防止運動を実施中です。
- ◆農薬を使用する際は、ラベルをよく読んで正しく使用しましょう。